

あの子の為なら頑張れる

僕を見つめるあの子の顔を、頭に浮かべて
僕は一心に目をしてやった。
「あの子の為なら頑張れる」と思った。

あんまり、頑張りすぎたかな。
一番、長いこと腹筋やっていた。

「よお、はりきってるやん。」と
皆が声かけてくれた。

足、手、背、かたが、家に帰れば痛くなるだろう。
特に腹の筋肉は、ムチャクチャ痛むだろう。

一時すぎまで、練習続けた。

その後、千本丸太町までバスに乗り、
洛北高校前迄、市電五番。

そこから、吉田はん宅までテクテク歩いた。

吉田はんはお父ちゃんの知り合い。
奥さんがニコニコして玄関に出て来て、
僕の高校入学手続きの連帯保証人の判子をもらう。

帰りも、一本松まで歩き、バス一番に乗り、三条京阪につく。
家に帰ると三時半。

暇で、そのまま、床に入り、おめめをふたす（目を閉じる）。
呼ばれて、起き上がり、夕食取って、すぐまた寝る。